

令和 8 年 度

入学者選抜学力試験問題

小 論 文 (後期)

〔注 意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は 4 ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て、問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って、解答用紙 2 枚に受験番号および氏名をそれぞれ必ず記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された場所に、縦書きで記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は、句読点と括弧を字数に数えること。
6. 解答は、内容とともに、語彙、漢字、構文、句読点の付け方、表現の正確さにも注意して書くこと。
7. この冊子は、持ち帰ること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

自然における生命いのちの営みの中で教育をとらえ直す。その必要性を訴え続けたのは大田堯たかし先生だった。命ある全てのものには「根源的自発性」があり、自ら生きようとする。だが、自然界で生きるためには学ばなくてはいけない。乳の吸い方、身の守り方、獲物の捕まえ方……。だから、生きるとは学ぶことであり、学ぶことは生きることでもある。

そんな大田先生思想は、本来は途切れることのないその生命の営みを、年齢で分け、年度で区切り、「教科」に区切り、「授業」に押し込み、生きることと学ぶことを無理やり切り離してきた近代の教育が、どれだけ不自然なのかを教えてくれる。

だから、今回のような長期にわたる学校閉鎖が起こると、子どもたちは生きているのに「学んでいない」と見なされてしまう。コロナ危機は、子どもたちの「学習」を停止させ、彼らに生きること求めた。本来それは、近代の教育が引き起こしてきた、生きることと学ぶことの乖離かいりを解消するチャンスであるはずだ。それなのに、子どもたちが学んでいないと心配した大人たちは、逆に今度は子どもたちの時間を「お勉強」ばかりで埋め尽くし、子どもたちが生きる余白をも奪おうとしている。

「おとなに聞いてほしい」

2020年6月25日付「西日本新聞」の「こどもタイムズ」に、ある小学6年生の投稿が掲載された。タイトルはズバリ、「おとなに聞いてほしい」。

僕は福岡市の小学校に通う6年生です。福岡市の学校では、2カ月半以上続いた休校での勉強の遅れを取り戻すために、授業時間を短縮して授業の数を増やすことや行事の削減、また、夏休みの短縮も決まりました。

これから暑い夏にマスクをして、友達と距離を保って、急いでたくさん勉強する。考えただけで息が苦しくなり、学校に行くのがつらいと感じます。僕たちはロボットではありません。

体育や調理実習などもやりたいです。プールや運動会などの行事もなくなります。体育や行事で活躍する友達もいっぱいいます。楽しみにしていた修学旅行も行えるかどうか今のところ分かりません。

子どもの時にしかできないことがたくさんあります。勉強も大切なことだと思いますが、友達と遊んだり、ケンカして仲直りしたりして学ぶこともとても大切だと思います。

このまま詰め込むしかないのでしょうか。本当に他にできることはないのでしょうか。大人に僕たち子どもの気持ちや意見を聞いてもらいたいと強く思います。

三小田陽^{さんこだひなた} (12)

「そうは言っても、授業が大事」「受験で不利になると困るから」と言う大人は多いのだろう。「学力」がテストの点数で測られ、受験を勝ち抜いて大企業に入ることが「成功」と見なされる今の社会ではしかたのないことかもしれない。

しかし、そのような貧弱な「学力」観と子どもの多様性を祝福できない社会の枠組みの中で答え探しをするから、八方塞がりを感じるのだろう。本来問うべきは既存のパラダイム⁽¹⁾そのもののなかに、その中でつじつまを合わせようとするから無理が生じるのだ。

私自身が学校に求めることは、いたってシンプルだ。子どもたちと学ぶ喜びを分かち合って欲しい、そして学び方を教えて欲しい。アイルランドの詩人、イエーツが言ったとされる言葉がある。

「教育とは、⁽²⁾バケツを満たすことではなく、心に火をつけること」

今、教育現場は「どうやって授業時数を確保するか？」という問いに迫られ、昼休みや夏休みの短縮、土曜授業、兵庫の一部地域では8時間授業をしている小学校もあるという。しかし、授業時数よりも大事な問いは、「どうしたら子どもたちの心に火をつ

けられるか」ではないだろうか。

授業時数の確保に明け暮れるのは、急いでたくさんバケツを満たすようなものだ。しかし、もし子どもの心に火をつけることを目的に授業をするならば、300時間教えたってダメなものはダメなのだ。逆に、8時間で火をつけられる授業だってあるだろう。コロナ禍で従来の学びの脆弱さが露呈した今だからこそ、真剣に考える必要がある。私たちはこれから、どんな学びを追求していくべきなのか。

最近ずっと、私の恩師でもある、故マキシ・グリーンの言葉を思い出している。

「私たち教師は、教え子や皆で分かち合うこの世界のために、より良い世の中を求める気持ちがあれば、事務員や役人としての人生をまっとうするしかない。私たちにとって、今ある世の中を再生産するだけでは到底足りないのです」

優しく、核心を突く言葉を放つ人だった。目の前の子どもとただ一生懸命かわるだけでは不十分です。教師というのは創造的な仕事なのであって、その教師が子どものために闘わなければ、システムの歯車となるのは当然でしょう？ そんな彼女の叱咤激励が聞こえてくるようだ。

今ある世の中を再生産するのが教育なら、それを問い直すことができるのもまた教育だ。どうしても密を避けられない40人学級制は改正する。子どもたちの声に寄り添い、コロナ禍を機に、学校を「人を育てる場所」として再構築する。多様な成功の形を示し、一人ひとりの自己実現を教育の目標ととらえる。「学校に行くのがつらい」と感じている「陽くん」は全国にいる。教師が子どものために声を上げれば、保護者もきつとついてくる。

（鈴木大裕著『崩壊する日本の公教育』による。一部改変）

問一 傍線部(1)について、著者は何を「既存のパラダイム」だと捉えていますか。八〇字以内で述べなさい。なお、パラダイムとは「ある時代に支配的な物の考え方や認識の枠組み」のことを意味します。

問二 傍線部(2)に従えば、あなたが教員になった際に、子どもの「心に火をつける」ためにどのような教育をしようと考えますか。「バケツを満たすこと」と対比させ、そのように考える理由や具体例も含めて四〇〇字以内で論じなさい。